

歴代宝案

訳注本

第十五冊

第三集 卷一（卷一三）

別集 嘒嘆情状・嘒嘆唾三国情状

咨集 文組方

冠船の時唐人持ち来たり候貨物録

二集歴代宝案目録（乾坤）

訳注

西里
喜行

訳注協力者

本村育恵
漢那敬子

『歴代宝案』 訳注本第十五冊の刊行に際して

沖縄県教育委員会

教育長 金城 弘昌

沖縄県は、かつて琉球王国として、その地理的優位性を發揮して中国をはじめとするアジア諸国と交易する中において、それらの国々から大きな影響を受けつつ、個性豊かな文化を育んできました。十四世紀からおよそ二百年にわたり、琉球は、日本、朝鮮国、シャム・パタニ（現在のタイ）、マラッカ（現在のマレーシア）、スマトラ・パレンバン・スンダ・ジャワ（以上現在のインドネシア）、安南（現在のベトナム）等の国々と交易を重ね、東アジアの一大貿易拠点として発展してきました。これら諸外国との交易関係を支えたのが、琉球と中国（明・清）との冊封・朝貢体制だといえます。

『歴代宝案』は、琉球王国とこれらアジア諸外国とのおよそ五百年にわたる外交関係文書を集成したものです。王府は、長く天妃宮に保管されてきた外交文書の破損・散逸を恐れ、外交を専任する久米村の人々にその編集を命じました。こうして一六九七年に『歴代宝案』第一集四十九卷（一四二四年～一六九七年までの外交文書を収録）が二部作成され、王府と久米村にそれぞれ保管されることとなったのです。その後、第二集二〇〇卷・第三集十三卷（一六九七年～一八六七年）、ほかに別巻八冊（うち、第二集目録四冊）が編集されました。王府に保管された『歴代宝案』は、廃藩置県の際に明治政府に引き継がれたとされますが、いまだにその所在は不明です。一方、久米村に保管されたものは、一九三三年に旧沖縄県立図書館に移管されましたが、去る沖縄戦で散逸し、影印本や写本が数種残されただけです。『歴代宝案』は、沖縄の外交史料であるばかりでなく、東アジア史研究にとつても第一級の史料として、沖縄が世界に誇る文化遺産です。しかしながら、膨大かつ難解な史料であるために、長い間、ごく限られた研究者の間でその存在が知られるのみでした。沖縄県は、平成元年度（一九八九年）から、現存する各種の影印本や写本をもとに『歴代宝案』校訂本・訳注本の編集事業に着手し、平成三年度（一九九一年）から刊行を開始しました。この編集事業の目的は、『歴代宝案』を広く普及し、琉球王国交流史研究の進展に役立てるとともに、県民の皆さまが郷土の歴史を再認識し、さらには国際社会に対する沖縄文化発信の基礎資料として活用することにあります。

本年度は、訳注本第十五冊を刊行いたします。訳注本は、『歴代宝案』の内容をより分かり易くするため、校訂本の漢文を全文読み下し、必要に応じて語注やルビを付したものです。

平成六年から刊行されてきました訳注本の最後となる本書には、歴代宝案第三集（巻一～十三）として清咸豊九年～同治六年（一八五九～一八六七）の間の進貢、接貢、謝恩、慶賀、琉球船や中国船等の漂流、漂着民を相互に送還する際に交わした文書が収録されています。特に一八五一年から続く太平天国の乱などによって北京への進貢がかなわなかった進貢使節に関する記事や、一八六六年に挙行された琉球国王尚泰の冊封に関わるやりとりなどが収録されており、琉中関係が大きく動揺していた状況を垣間見ることが出来ます。また、本書には、別集として嘒嘒情状・嘒嘒唾三国情状・咨集文組方・冠船之時唐人持来候貨物録・二集歴代宝案目録（乾坤）も収録されています。これらには、一八四〇～五〇年代に琉球へ頻繁に来航するようになった欧米船（フランス・イギリス・アメリカなど）や、一八四六年から八年間、那覇に滞在した宣教師ベッテルハイムの退去に関わり、清朝との間でやりとりされた文書や中国における混乱など、王国末期の琉球の外交や緊迫する東アジア情勢を伝える貴重な文書が含まれます。その他にも、一七一九年に来琉した冊封使に関わる貿易品の記録や、歴代宝案第二集（巻一～一二五）の目録（乾坤）を見ることが出来ます。本書が、琉中関係史ならびに東アジア史研究のさらなる発展に寄与することを願っております。

最後に、本書の刊行につきましては、沖縄県歴代宝案編集委員会及び同作業部会の御協力を得ました。また、訳注にあたっては、担当された西里喜行先生をはじめ、参考史料を所蔵する国内外の各研究機関及び多くの皆様に御尽力・御協力をいただきました。深く感謝するとともに、歴代宝案編集事業に、なお一層の御理解と御協力を賜りますようお願い申し上げます、刊行のことばといたします。

令和四年（二〇二二）三月